

大崎短歌会は、昭和49年（1974年）4月、短歌教室として発足し、その4年後から同好会として活動してきました。

月1回の歌会を開催し、会員から事前に提出された歌を読み、それぞれの短歌について感想を述べたり、よりよい短歌にするために批評し合います。現在は9名で活動しており、集まることができない会員は郵便や電話で歌を提出するなど、それぞれの生活スタイルに合わせて柔軟に対応され、50年間継承されています。

今回の特集にあわせて、「大崎のうた」と新年にちなんだ「新春」という兼題で詠んでいただきました。

萩生るる野方の原は父母が生きて来し処吾が生れし郷

海亀や浜辺来りて幸多き大崎なりと思ひ再び

ちりめんや田水マンゴー匂ふ町いちずに拓く大崎の民



### 兼題「新春」

めざす夢叶わぬままに遠く来て七度の干支の年新たなる

新春の朝あしたに昇る日輪が光り輝き日の本照らす

梅の木を染めて上るのぼや元日の朝日に合わす皴深き手を

にひ年の気高き山に抱かれし春の光に託す思ひを

新春の安らひの短歌うたまさぐりて戦ひ止まぬ焦土に向きぬ

山下 海征

井元かず子

馬場 みさ

本後 淑子

実吉 安仁

山下 海征

井元かず子

馬場 みさ